

## 特徴的な出土遺物

建物の柱穴から出土する遺物は少量ですが、周囲の同時期の遺構からは、特徴的な須恵器が出土しています。その一つが、焼成時に発生するいわゆる不良品です。広く流通するものではなく、須恵器窯跡の近くや須恵器生産を管理する施設などから出土します。

その他、墨書土器や、転用硯、コップ形須恵器も出土しています。コップ形須恵器は平城宮などで出土例があり、近隣では竜王町ブタイ遺跡(図1)で出土しています。墨書土器や転用硯の存在は、ここが郡衙と関係する公的施設であったことを窺わせます。

以上のように、御館前遺跡で出土した奈良時代の遺物群は、いずれも生産施設やその管理施設、あるいは役所といった公的施設で用いられたものであることが想定されます。



不良品の須恵器  
焼成時に歪んだり、割れたり、上手く焼けなかった須恵器。

## まとめ

以上の遺構と遺物の内容から、みつかった掘立柱建物群は、官衙等の公的施設の建物群とみられ、本遺跡が蒲生郡衙推定地にあることを考えると、蒲生郡衙に関連する施設に伴う建物群と考えられます。

今回出土した土器のなかでも、不良品の須恵器が注目されます。竜王町の鏡山古窯跡群の山麓にあるブタイ遺跡では、大溝の中に多量の不良品須恵器が投棄され、大溝の近くには、今回同様、公的施設とみられる掘立柱建物群がみつかっており、遺構・遺物の状況から、須恵器生産地の選別場と考えられています。

今回の調査で出土した不良品須恵器の量は、ブタイ遺跡ほどではありませんが、焼成不良品が一定量含まれていました。これらのことから、鏡山の須恵器生産は、郡衙で管理され、ブタイ遺跡で選別された後(1次選別)、郡衙に持ち込まれてさらに選別されたと考えられます(2次選別)。

今回の調査成果は、実像が明らかではない蒲生郡衙を考えていくうえで重要な資料となります。また、郡衙域にありながら現存する千僧供古墳群や、今回見つかった周溝墓が後世の掘立柱建物群に壊されていないことは、郡衙と古墳群の関係や、後に郡司となるであろう在地豪族との関係など、地域の歴史や古代の景観を復元するうえで重要な発見例といえるでしょう。



コップ形須恵器  
計量カップという説もあります。近隣では竜王町ブタイ遺跡で出土しています。



墨書土器  
「土」? 「土」? と書かれているようです



転用硯  
器や蓋を硯として使っていました。

# 御館前遺跡発掘調査現地説明会資料

令和6年(2024年)10月12日(土) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会



## 遺跡と調査の概要

**調査の概要** 公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県東近江土木事務所が計画する近江八幡竜王線道路整備事業に伴う発掘調査を令和4年(2022年)9月より実施しており、現在も調査継続中です。これまでの調査では、弥生時代～古墳時代の集落跡や奈良時代頃の掘立柱建物、鎌倉時代の集落跡がみつかっています。

今年度の調査では、弥生時代後期の円形周溝墓や古墳時代初頭の方形周溝墓、奈良時代頃の掘立柱建物群を検出し、当時の土器等が出土しました。

**遺跡の概要** 御館前遺跡は近江八幡市千僧供町に所在し、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡・郡衙跡・墓跡として知られています。遺跡の範囲内には、古墳時代中・後期(約1,500～1,400年前)の古墳群である千僧供(せんぞく)古墳群があり、県史跡に指定されています。また、本遺跡や周辺の遺跡からは奈良時代(約1,300年前)の墨書土器や木簡等の文字資料が出土していること等から、古代の蒲生郡衙(ぐんが)関連遺跡であると推定されています。郡衙とは古代の地域行政区分である「郡」を治めた役所であり、その役人のトップ(郡司)には地方豪族が任命され、蒲生郡一帯を統治していました。同じ地域で古墳群が造営された後に郡衙が造営されていることから、この有力者たちは古墳時代から飛鳥・奈良時代の間、現在の千僧供町付近を拠点として継続的に統治していたと考えられます。

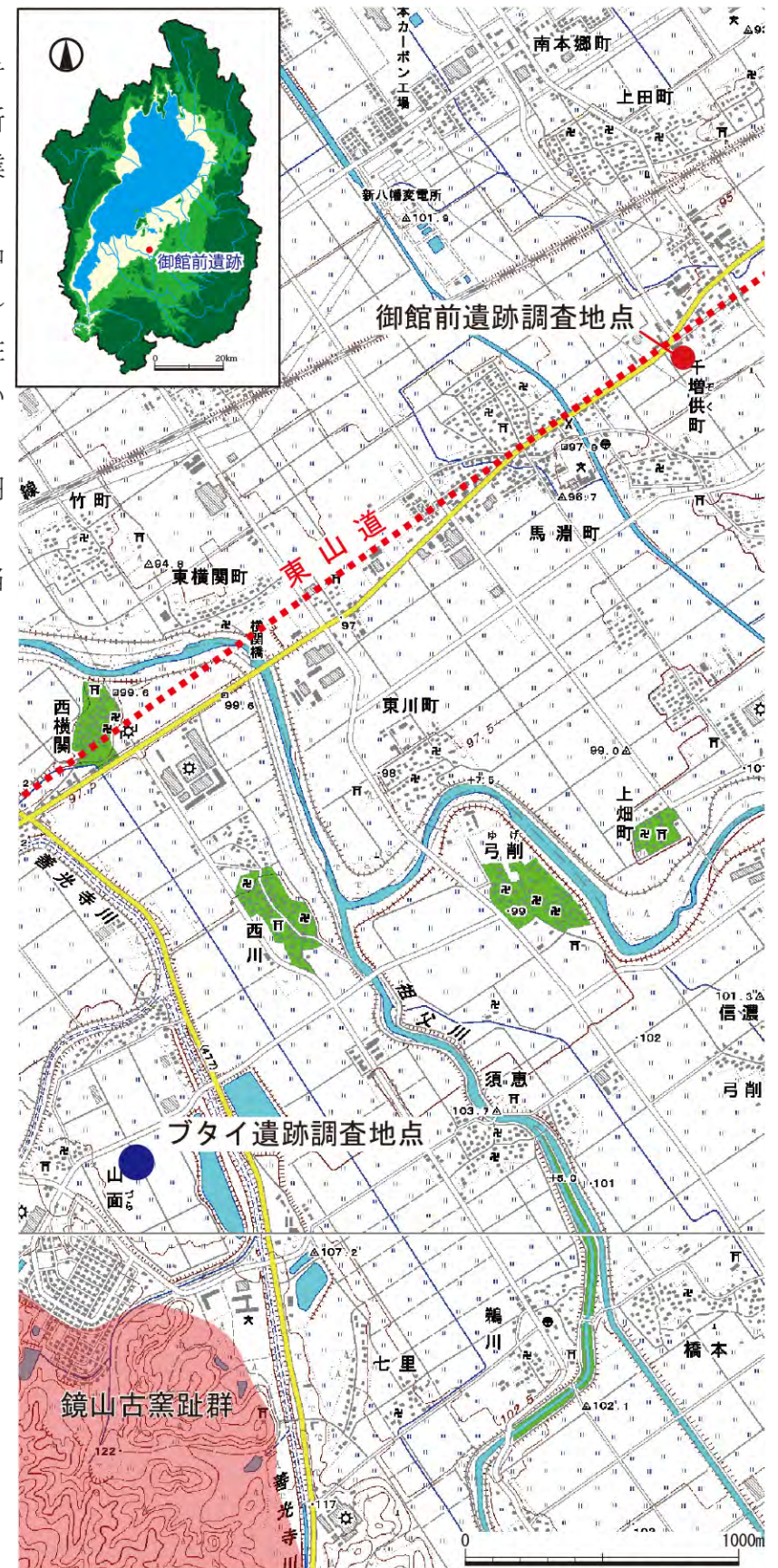


図1 御館前遺跡の調査地点(赤丸)と周辺の関連遺跡



## 大きな柱穴の建物群

御館前遺跡とその周辺遺跡では、これまでの調査において、奈良時代頃の掘立柱建物が15棟以上確認されています。いずれも正方位(ほぼ真北)に主軸をとり、一辺1m弱の方形平面形状の大型の柱穴から構成されている建物もあります。このような、正方位の主軸と大型の方形の柱穴から構成される掘立柱建物は、飛鳥・奈良時代から平安時代頃にかけての官衙等、公的施設に用いられる建物にみられる特徴です。

今回の調査では、あらたに奈良時代の掘立柱建物を13棟検出しました。いずれも上記の特徴をもっていることや、当地域が蒲生郡衙推定地であることから、蒲生郡衙に関連する建物群と考えられます。



掘立柱建物1の柱穴は大きいだけでなく、地面下の硬い砂利層を貫いて掘り込まれていました。重要な建物だったのでしょう。



加工機械のない時代は、手斧(ちょうな)や鉋(やりがんな)などで仕上げるため、多角形の断面になっています。



## 古代の主要道「東山道」と建物群

奈良時代、中央と地方を結ぶ、東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道の7つの官道が整備されます。東山道(とうさんどう)は、近江を起点に美濃、中部高地を経て東北へ至り、江戸時代の中山道は東山道を踏襲して整備されます。



掘立柱建物群の北方約50mには、東山道が通っています。今回の調査地点はこの東山道に面する位置にあることから、当時の東山道を行き交う人たちの目に入りやすい建物群であったと考えられます。また、主要道に面することから、物資の搬入と搬出に有利な場所ともいえます。

## 500年前の墳墓を避ける建物群

掘立柱建物1～5の周囲では、弥生時代後期～古墳時代初頭頃の円形および方形の周溝墓を確認しました。これら周溝墓と掘立柱建物群との間には、最大で500年程の時期差があり、両者に直接関係はありません。しかし、奈良時代の建物群の配置、とくに柱穴の位置と周溝との関係をみると、柱穴は周溝と重なりますが、墳丘部分(現状では墳丘は残っていません)とは重なりません。また、周溝埋土の上層からは奈良時代の土器が少量ながら出土します。

おそらく、奈良時代にはこのことは、奈良時代には方形周溝墓の周溝はある程度埋没しているものの、墳丘が残存していたとみられ、周溝を埋めて整地はしても、墳丘を壊すことなく、できるだけ方形周溝墓を避けて、掘立柱建物を建てたものと考えられます。

当時、方形周溝墓を墓と分かっており、穢れを嫌って墳丘には触らなかったのか、あるいは、この地の遠い先祖の墓を大切にしながら建物を建てたと考えられます。

